

昇 陵

ISSN-0913-1906

No. 40

関西大学博物館集報
平成12年3月31日発行

[SENRYO・KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



ガラス器 Glass Ware

目次

相撲と儀礼	2
唐節愍太子墓壁画の鳳凰文について	4
玄宗の泰陵踏査記	7
「威徳」の扁額と「威徳館」.....	10
北京の智化寺	12
新収蔵資料 複製内行花文八葉鏡	14

関西大学博物館

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

Tel 06-6368-1171 (直通) FAX 06-6388-9928

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/museum.htm>

相撲と儀礼

上井久義

大相撲の時期になると、中継放送・ニュースなど、繰返しその内容が紹介される。力や体重の差に加えて、一瞬の間にくりだされる技に観客の声援が一層高まるようである。

それにしてもこの競技、単にスポーツとして見ていると、何か理に合わない約束事を含みもっている。例えば、相撲をとるごとに、次の力士は土俵の内に塩をまく。また相手を力強くなげとばしても、その力士の足がわずかでも土俵の外の土にふれておれば、その力士が敗者とされる。競技そのものと関係のなさそうな事柄として、土俵の内に女性が立ち入ることを避けようとする思想も理解のしにくいことである。似た競技がモンゴルにあるが、ルールは異なっている。ベトナムのハノイ美術館には、裸にマワシをつけた男性が組みあっているレリーフが展示されていたから、東南アジアにも類例が存在していたようである。

少しかわった相撲に、祭礼の度に奉納される幼児の泣き相撲というのがある。マワシをつけた幼児が神前でかかえられて、相撲をとる仕草をくり返す。そして先に泣きだした子供が勝ちとされることが多い。類例を聞くことが多いがこれはおそらく新生児を氏子の一員として氏神に認めてもらう儀礼であったと考えられる。声をあげた子供の方が先に氏子として認知してもらえたとでも考えたのであろう。

古い時代の相撲については、野見宿禰と当麻蹶速が相撲をとった話は有名で、これにちなんで当麻には相撲博物館が造られている。古墳時代の例として、和歌山市井辺八幡山古墳出土の

埴輪が男子力士像を示すものとされている。裸体にマワシを付けた姿は力士として異義のない姿といえよう。これがどのようなルールによって競技が進行したのか興味深い、その内容はわからない。律令制下になると、都での年中行事の一駒として定着をみるようになる一方、地方でも様々な相撲が行われたようである。滋賀県の東南部にある御上神社には、相撲をとる木彫の人形が所蔵されている。また祭りの度ごとに造られるずいき神楽には、ミニチュアの土俵が飾り付けられている。現在でも祭りに境内で相撲が奉納されている。しかしこれはスポーツと云うよりも勝負がはじめてから決められている演劇のようなものである。木彫の人形で表現された相撲も、おそらく現在の儀礼に組み込まれた相撲と同じルールであったと思われる。神官の行司が立ち会っているが、勝敗が決まっているとしたら、その判断をするというより、勝つべき者が勝ったかどうかを確認するために立ち会っていることになる。淡路島の北淡町にある石上神社の祭礼も風変わりであった。神前の境内に筵を敷き、今年の祭り当番と来年の祭り当番が相撲をとる。それも二人は筵に正座をして向かいあい、そのままの姿勢で相撲をとる。上半身で組み合って、押したおすだけのことである。三番勝負になっていて、最初にどちらかが勝つと、次は必ず負けた方が勝ち、三度目は来年度に当番を務める者が勝つことになっている。勝負がはじめてからわかっていることに当事者も少々抵抗があって、勝つべき者が負けそうに見せて観客をはらはらさせたりもするが、結局ははじめてから定められている結果におちつく。行司は御幣の付いた榊の枝を持って立ち会っているが、次年度の当人のあとおしにまわり今年の当人が劣勢になった所で素早く来年度の当人の勝ちを宣してしまう。神事相撲では、愛媛県大山祇神社で旧暦5月5日に行われる大山祇一人角力が有名である。ここでは男性一人が登場し、いかにも二人で相撲をとっているかのように演ずる。初めはこの男性が優勢で、いかにも勝ち



ハノイ美術館展示の相撲像

そうに見せておきながら、最後には敗退することになっている。その理由は、この男性は姿の见えない大山祇神を相手に相撲をしているので、いくら元気に立ちまわっても、最後は神に負けるのが当然の結果だと考えられている。行司も立ち会わず、結局のところは負けなければならない相撲というのは、見物する方でも力はいらない。そのことが一人相撲の力士役に見物にたえるような演技を見せることを要求することになり、参加者をたのしませる一人角力が展開することになる。

埴輪の力士像の場合はどうであろうか。一体が確認されているだけであるから、二体が組み合った姿で立っていたとはかぎらない。しかもその両手は前にだした姿になっているので、二人ががっちり組んだ姿を示していない。何かを両手で持ってさしだしているのではないかと思われる。足元もひらいてふんばった姿ではなく、両足のかかととはあまり開かず、やや前かがみの姿勢である。マワシをつけているので、これは力士の姿そのものを示している。

人物の埴輪は、古墳の埴丘上やその袖の部分に立てられているが、これは当時の儀礼内容を再現するために必要な形で配置されていたと見るのが一般的な考えであろう。したがって、当時の相撲は、現代社会で考えられるようなスポーツに参加する競技者として立てられていたと見るよりも、儀礼の一助に組みこまれた力士像と見る方がより現実に近い理解ではないかと考えられる。

古代の儀礼を考える際に、出雲国造家が伝える諸神事は興味深い例が多い。そのなかでも新嘗の神事に国造が忌み籠りする場で、祭祀を補佐する男性が、裸にマワシをつけた姿でこれに奉仕する例が目される。裸であるのは、一切のケガレをとりはらったいでたちを示し、マワシだけの姿で奉仕しているのであろう。記録のうえでは近世以前に遡及できないが、司祭者の神事を補佐する役割りは、それ以前から存在していたことは充分に考えられる。寒い季節に裸でいることは一般には耐えがたい任であるが、特殊神事の奉仕者としてこのことが要求されたのであろう。この人物、姿は力士であっても職務は司祭者の補佐である。このことは、力士がこの役を務めるのではなく、司祭者の補佐役と



上：八幡山古墳の埴輪 下：石上神社の相撲

しての出で立ちが力士の姿であったことによるのであろう。女性をこのような姿で参加させ、勝者を祭祀の補佐役とする相撲には加えない思想があって、土俵内にその立ち入るのを避けようとする考えが定着するようになったのではないと思われる。土俵の内側に塩を撒くのは、その神聖性を保つための行為であり、勇み足を敗者とするのは、神聖さを喪失した者を失格としたことによるのであろうと見るができるようである。次年度の祭りの当番を差し定める方法も様々であるが、クジ引きによる例が多い。三方に名前を記した小さな紙をまるめて置き、神官がこの上に御幣をかざし、静電気によって幣に付着した紙に記されていた人物を次の当番にきめる。偶然に当たったのではなく、神の意志によってすい上げられたと考えている。相撲によって次期祭祀担当者がきまるのも、その勝敗が神の意志を反映していると考えていたのであろう。

唐節愍太子墓壁画の鳳凰図について

網 干 善 教

唐第4代中宗顕の第3子であり皇太子であった節愍太子重俊墓が発掘され、その墓室に描かれていた壁画の全容が陝西省考古研究所編『陝西新出土唐墓壁画』（以下『新出土唐墓壁画』と略称）と題し1998年11月付で刊行された⁽¹⁾。

筆者は1972年3月、奈良県明日香村所在の高松塚古墳で極彩色の壁画を検出、描かれた四神図のうち東壁中央青龍図の頸部に鮮やかな色彩で×文様の頸飾のあることに注目し、東アジアにおける類例を聚成、若干の考察を行った⁽²⁾。その後も折りにふれ資料の蒐集を行ってきたが、今回刊行された『新出土唐墓壁画』のうちの節愍太子墓内の鳳凰文に、同様の文様があることが分かり、これについて紹介すると共に所見を述べておきたい。

節愍太子は壁画で有名な乾陵陪塚の懿德太子

重潤の弟であり、父中宗の兄は同じ壁画墓と知られている章懷太子賢であることは知られている。

また、唐高宗と則天武后の間に生れた父中宗、その弟は五代睿宗旦であり、その子の第六代玄宗隆賢とは従兄弟にあたる。詳しい系譜は省略するとして、節愍太子は中宗の皇太子という地位にあった。

その頃唐王朝では権力闘争が繰り返されており、なかでも武三思は、中宗の娘である安樂公主と謀り、公主を皇太女とするために節愍太子を失脚させようとした。それを知った節愍太子は武三思父子ら十数人を斬ったが、結局反逆にあい敗死した。第五代睿宗旦は節愍太子は無罪であることを明らかにし、景雲元年（710）定陵の陪葬墓とした。



図一 飛鳳図

発掘された節愍太子墓は陝西省富平県宮里郷南陵村に所在する。刊行された『新出土唐墓壁画』には次の如く概要を記述している。

墳丘の外形は覆斗形を呈しており、高さ約26m、東西の長さは約120m、南北の幅は約150m、陵園には門闕、角樓が設けられている。墓の前には石獅子、石人などが立てられている。

地下の部分の全長は約54m、長くて、傾斜した坂のような甬道と3箇所の過洞、4箇所の天井をもつ双室磚墓である。主要な副葬品には紛彩俑、三彩器、太子の身分を表す玉冊などがある。

本来、墓道から墓室まで、壁面全体に壁画が描かれていたが、現に残存するのは、山石風景、戟を持つ儀衛、闕樓、馬球を打つ場面の一部と、東宮府吏、内宮、侍従などの人物画と甬道の卷頂に描かれた鶴、鳳凰、孔雀などである。

節愍太子墓は、章懷、懿德太子墓が発見されて以来の、壁画が最も精彩で、保存状態が

よいものである。

この『新出土唐墓壁画』には数々の重要な資料が掲載されているが、そのうち頸部に×文様の装飾のある鳳凰図は2箇所に見られる。

本墓には前甬道に翔鶴図、飛鳳図、飛鳳図、孔雀図、后甬道卷頂飛鳳図、飛鳳図の6箇所に鳥文図が描かれている。このうち前甬道の飛鳳図と飛鳳図をみると、飛鳳図の方は頸部の位置に剝落があり不明であるが、飛鳳図の方は鮮明に残存する。因みに「鳳凰」の「鳳」は雄の鳥であり、「凰」は雌の鳥を表す。したがって「鳳凰」は雌雄対称となる。

さて、123図に挙げられ飛鳳図は前甬道卷頂の図である。この鳳文について概略次のような説明がある。

鳳凰図の東壁の鳳であり高さ90cm、幅145cm、頭は巨大な龍頭に描かれ、鷹のような鋭い目で睨み、口は開いており、みるからに猛威である。

鳥の華麗さと龍の氣勢を兼ねている。鳳凰は唐代の墳墓の壁画に常にみるところであるが、



図—2 后甬道卷頂飛鳳

雄と雌に分け、精細、伝神のように製作されたのは実に稀なことである。

頸飾×文様をみるのはこの鳳であるが、当然対称をなす雌の鳳にも描かれていたことは確かであろう。

同墓にはもう1個所鳳凰図が描かれている。それは第125図の後甬道巻頂鳳凰図の西側に描かれた鳳である。説明によると後甬道の壁画は殆ど剥落していたが、墓室と接続しているところで一幅が残存している。そのうち鳳は鳥のような頭上に「靈芝冠」を戴き、頭側に長い羽根を後向きに浮かべ、蛇のような頭に「綉球」が繋がれ、翼を上げ、足を収めて飛んでいる様子で表現されている。

前甬道の鳳の位置は東壁にあることから西側にある本例は雌であると推測できるが、製作技法はやや簡略、粗末で、線条を描く能力も遜色するので、両者は同一人物により描かれたものではないだろう。

この後甬道の雌の図は頸部にあたるところに剥落があって定かでないが、ここでも雄雌共に頸部に×文様が描かれていたと思われる。

この前甬道の鳳、後甬道の鳳、共にS字状に

曲った頸部に、高松塚古墳東壁や奈良薬師寺本尊台座の東面青龍図にみられるような×文様が描かれている。因みに×文様は青龍図だけにあるのではなく、かつて指摘したように⁽²⁾四神図壁画のほか、唐代文物の装飾図にも多くみられるものである。

四神図をはじめ多くの文物にみる×文様の頸部装飾という特殊な文様は、現在の知見による限り、中国唐朝の都、西安市周辺、高句麗の都集安、平壤周辺の壁画墓及び日本古代の宮都飛鳥、平城薬師寺、正倉院宝物などにあつて、時代的に唐文化と白鳳、天平文化を結ぶ事象であるともいえる。

その頸飾は3種類に分類できることを示しておいた。唐節愍太子墓壁画の鳳凰文頸部装飾文はこのうちの第1類であるといえる。

節愍太子墓の鳳凰は飛翔する雄壮な姿を描いている。これはそれまでの動物文の概して静止する姿態とは異なるものと思える。

さらに、×文様の頸飾はその類例からみて年代的には唐代の象徴的な文様であるとも考えられる。そして対称的な双鳥図の場合、本書でも指摘されている如く、東側は雄である鳳、西側は雌である鳳と描き分けられていることも注意してよいだろう。

次に後甬道飛鳳図の頭頂に靈芝冠がみられるが、この類例は町田章氏が挙げられる墓門の朱雀図、『海内外唐代銀器萃編』の双鳳銜緩直腹盤、西安市南郊何家村出土の孔雀紋蓋頂銀箱紋飾の一對の鳥文や、正倉院宝物紫地鳳形錦御軾の鳥文などにもある。また頸部に火焰形の装飾もみられる。

節愍太子墓は710年の築墓であるから、わが国では藤原京から平城遷都の年に相当することを考えておくことが肝要である。

なお『新出土唐墓壁画』を本学大学院文学研究科博士課程後期課程に在学中の留学生汪勃君より提供をうけた。記して謝意を表する。

註(1) 陝西省考古研究所編『陝西新出土唐墓壁画』重慶出版社、1998年（使用した図は本書より転載した。）

(2) 網干善教「四神図の頸部装飾とその類型」『関西大学博物館紀要』第4号、1998。『高松塚古墳の研究』所輯、1999年



上 節愍太子墓全貌 下 節愍太子墓発掘現場

玄宗の泰陵踏査記

藤 善 眞 澄

1990年8月 本学を含む三大学30名ほどを引率して、恐らく誰も試みたことのないであろうコースの中国史蹟巡りの旅を敢行した。名古屋から開設されたばかりの西安空港へ飛び、汽車で甘肅省の天水に向い待機していたバスに乗りかえ、南に下り麦積山の石窟群を見学。幸いにも陝西師範大学での教え子が西安旅遊社の幹部となっており、あらかじめ西安から天水へバス一台を特別に廻して置いてくれたお蔭で、スムーズに事が運んだ。

この旅の圧巻は三ヶ所。第一は麦積山より北上して天水にもどり、一泊ののち渭水を渡って海拔二千メートル余り、隴山山脈の尾根づたいにひた走るコース。後漢末・三国時代に始まり「村」のルーツとなった塢・壘・壁などもかくやと思わせる聚落が点在し、黄砂ではなく白砂の山肌に緑樹が影を投げかける見事な風景に、ただ絶句するばかりであった。第二は張家川の回族自治区へ抜け、固関鎮より渭水へ流れ込む千河ぞいに下り、隴県・千陽県を經由して鳳翔へ、そして仏指舍利の発見で沸く岐山の法門寺参詣である。法門寺の歴史と舍利塔の由来を学生達に説明し、あわせて「岐阜」の名の由来と

なった岐山と、周の祖先の古公亶父が南麓に城郭都市を建設し、周王朝の基礎を固めた経緯を語り、舍利塔の崩壊によって現出した地下宮殿を見学した。

三番目が、ここに紹介する玄宗の泰陵である。法門寺より西安に向う途中、『漢書』の撰者班固の墓、そして二度目となる馬嵬鎮の楊貴妃墓を訪ずれ、突如として出現した楊貴妃観音にど肝を抜かれ、燥きまわる学生達を恨めしく眺めることであった。西安で休養の二日を過し中国の友人達に別れを告げ、遙か北の山西省太原へ。西安で運転手ごと車を換え、渭水を北へ渡り高陵県をすぎ、唐高祖李淵の獻陵を左に望みながら富平県をへて一路蒲城県へとひた走った。それまで外国人の見学者はほとんどなく、ガイドや運転手も初めてというだけに、道順を尋ね尋ねの道行きであったが、前方にそれらしき山嵬を望見するや、胸の鼓動が高鳴り始めた。昭和41年に『安祿山』を執筆してこのかた、一度は訪ねてみたいと願った泰陵である。

蒲城は玄宗時代の奉先県である。玄宗の父睿宗が葬られた橋陵にちなんで奉先の県名が生れた。県城の西北約17キロに豊山、別名蘇愚山があり、豊山の東に金職山があり11代憲宗の景陵がある。金職山とは東北の峰つづき堯山、一名浮山には12代穆宗の光陵、その東方に位置するのが金粟山すなわち泰陵である。山上の碎石が金の粟に似たところから名づけられたと伝えるが、道教に心酔した玄宗には皮肉なことに、李白が「金粟如来 是れ後身」と詠じたように維摩居士を金粟如来とする呼びかたも行われていたのである。

唐の18陵は高祖の獻陵を頭として烏が東西に翼をひろげた姿に配置されており、西（右）端が梁山の高宗・武則天陵すなわち乾陵ならば、東（左）端が泰陵である。

上元二年（761）四月、甲寅、神竜殿に崩ず。時に年七十八。群臣、諡を上つて至道大聖大明孝皇帝と曰う。廟号は玄宗（『旧唐書』玄宗本紀）



写真1 唐玄宗泰陵碑



写真2 泰陵遠景

玄宗の崩御を伝えたくだりである。この年に建子の月（11月）を歳首と定めたり、翌年4月には肅宗が崩じて代宗が即位、元号を宝応と改めたこともあり混乱を招いているが、正しくは肅宗の上元三年（762）四月五日（陽暦5月4日）である。肅宗は奇しくも玄宗に遅れること僅か13日、4月18日に52才の生涯を閉じており、宦官李輔国の陰謀説もささやかれた。玄宗が李輔国の讒言により南内の興慶宮から西内に移され、幽閉同然の余生を送っていたのであるから、無理もない話である。

先旨を追奉して以て寢園を創り、広徳元年（宝応二年 763）三月辛酉（18日）、泰陵に葬る。

文にいう先旨とは開元十七年（729）十一月、高祖の献陵をはじめ太宗の昭陵、高宗の乾陵、中宗の定陵そして睿宗の橋陵に親しく拝謁したとき、金粟山を望んで竜がとぐろを巻き、鳳が飛翔する氣勢がある山だとぞっこん惚れ込み、父の陵墓も近く孝敬の志を忘れずにすむから、かの金粟山に葬って欲しいと漏したことを指す。こうして営まれたのが泰陵であり、時に猖獗をきわめた安史の乱が平定されて2ヶ月後のことであった。

今に残る玄宗の「遺詔」（『全唐文』巻38）には葬送儀礼について細ごとと訓示したのち、艱難の際にあり国家多端の折から、葬送の儀は



写真3 参道石像群

儉約に従い贅を省くよう遺言している。稀代の遊蕩児も、自らが招いた安史の乱により、朝野をあげて塗炭の苦しみに喘いだとあっては、さすがに悔恨の情切なるものがあつたに違いない。「特に宜しく裁改し、常規を守ること無かるべし」-前例にならって盛大な葬儀を営まないように-と誠めている。

それにしても前五陵の見事さにくらべ、泰陵は格段に見劣りがする。荒廃の程度にもよろう

が参道ぞいの石像等も貧弱であり、数も少なく、ひたすら不老長生を願い、楊貴妃を失ってからはおさら死後の世界にこだわりを持った玄宗には、まことに不釣り合いな寂しい陵寝である。高宗の乾陵もしかり、玄宗が常に意識していた太宗の昭陵にいたっては、太宗自らが12年間、実に貞観の治世の半ばを費し、莫大な経費と人力を投じて営んだ壽陵であった。

昭陵については紹介する機会もあろうが、泰陵との根本的な違いは陪葬墓の多さであろう。献陵25、乾陵16、定陵8、橋陵7はまだしも、昭陵156に対し泰陵1では比較にもならない。これは造営者の代宗が責を負うべきものではなく、陪葬は官費で賄われるため、財政の逼迫している代宗朝では、万やむを得ない仕儀であったと考えたい。なぜなら肅宗の建陵も、陪葬は尚父と仰がれた元勳の郭子儀一人であり、他に理由もあろうが代宗の元陵、徳宗の崇陵、憲宗の豊陵はいずれも陪葬ゼロなのである。

泰陵には唯一の陪葬墓がある。玄宗が宮中で阿翁とか將軍と呼ばせていた宦官高力士のものである。彼は玄宗が興慶宮から西内に移されたとき不穏な謀議に加わったと李輔国に誣奏され巫州、今の湖南省黔陽県に流された。たまたま罪に問われ左遷された史官の柳芳が高力士と邂逅。柳芳は有名な歴史家呉兢の『国史』を、韋述と一緒に補修しなおしたものの、玄宗以後の叙述は巧くいかず閑落した部分が多かったの

で、これ幸いと高力士に禁中の内情や政治むきのことを訊ね、『唐曆』40巻を撰述した（『旧唐書』149・柳登伝）。わが円仁や円載などの入唐時に、宰相であった李徳裕の『次柳氏旧聞』という作品がある。この書こそ散佚した柳芳の聞書をもとに構成された、高力士口伝の玄宗朝エピソード集にはかならない。

巫州にあること一年半、代宗の宝応元年（762）三月、許されて都へ帰る途中、朗州（湖南省常德市）に着いたとき、これも長安より配所に向う流人と出会い、玄宗が崩じたことを知らされた。高力士は遙か遠い都長安を望んで慟哭し、そのまま病の床につき同年七月、宿泊先の竜興寺で血を吐きながら息絶えたという。79才であった。代宗は玄宗朝における彼の功績を高く評価し、揚州大都督を贈って泰陵に陪葬することにした。王昶の『金石萃編』（巻100）に「高力士残碑」を収録しており、碑額に「大唐故開府儀同三司贈揚州大都督高公神道碑」と題され

大歴十二年歲次丁巳五月辛亥朔十一日辛酉奉

勅□

と刻まれている。つまり没後16年目に建てられているが、これが陪葬のときか、あるいは泰陵全域の補修整備にともなう所作かは、今一つ明白でない。王昶の実見した上部半截だけの神道碑は行方知れずになっていたが、1963年に発見され、さらに71年の調査で下部半截も畜産農家から発見、『考古与文物』1983年第3期に全容が紹介された。なお94年に三秦出版社の『全唐文補遺』第一輯がこれを採録している。

われわれが泰陵を訪ずれた時にも、ふと立寄った近隣の農家で、明らかに泰陵のそれと分る、さしずめ中国版漬物石と称すべき類のものを目にし胸を傷めた記憶が鮮明に甦る。大歴十二年といえば光仁天皇の宝亀八年にあたる。わが国ならば国宝級の文物が、柱の土台や踏石に使われている現実には長嘆息しながら、泰陵に別れを告げた。



写真4 瘞道開口部

「威徳」の扁額と「威徳館」

熊 博 毅

関西大学博物館の第2展示室に入っすぐの右側上壁面に「威徳」と書かれた大型の扁額がかかっている（額の大きさは縦118.5センチ、横277センチ、書の幅は縦60センチ、横180センチ）。これは昭和7年から昭和28年まで本学に存在し、主に講堂・演武場として使用された「威徳館」の内側正面の壁に掲げられていた額である。今回はこの扁額がかけられていた「威徳館」の歴史を簡単にまとめてみたい。



博物館に展示されている「威徳」の扁額

もとは昭和天皇即位大礼時の饗宴場

威徳館はそもそも昭和3年11月10日、京都で行われた昭和天皇の即位の大礼時に大饗宴場として建築されたものである。この建物は「登極令附式」(天皇の踐祚および即位礼と大嘗祭や元号などに関して規定した旧皇室令)に示されている豊楽殿にかわるものとして新造された。

当時の新聞(『大阪毎日新聞』昭和3年11月16日)は白木造りの大饗宴場の様子を次のように報じている。

大饗は二日間、三次にわたつて御所東側大宮御所北側に御新宮になつた大饗宴場で行はせられるのである、饗宴場は方四十一間、中央に方十四間の舞樂場を設け舞台には四面朱塗の勾欄をめぐらし萌黄色の地敷を布き、後方左右に鼙太鼓、その後方に鉦、鼓各一基を置き饗宴場の周壁、天井は申すに及ばずその構造彩色華麗を極め絨毯に至るまで善美をつくしてゐる、玉座、御座は

北壁際に近く南面して設けられ、その背面には大正天皇御即位礼の際今尾景年画伯描き奉るところの千年松山水の錦軟障を懸けられ今度謹写し奉つた川合玉堂画伯の悠紀地方風俗歌屏風(東北隅)山元春拳画伯の主基地方風俗歌屏風(西北隅)が左右に立てられてゐる

まさに「壮麗極りなき大饗宴場」であつたことが分かる。

饗宴場の一半を本学に下賜

即位式終了後、本学は宮内庁に対し、雨天体操場または演武場として活用できる広さの建物の下賜を願い出た。そして翌昭和4年10月1日になって饗宴場の一半が下賜されることに決定した(残る一半は大阪府河内長野市の観心寺に下賜された)。

今と違って尊皇精神が盛んだつた当事、本学関係者はこの内定を喜び、仁保亀松学長は昭和4年9月22日に举行された天六学舎竣工式の式辞の中でこの知らせを発表し、「近き将来、再建されるときは本学の設備上更に一段の光彩をそえることを信じる」と喜びを分かち合っている。

当時、本学の学舎は千里山(学部、予科)と天六(専門部、関西甲種商業、関西大学第二商業)に分かれていたが、下賜されることになった建物(「大礼記念館」)を本学は講堂ならびに武道場として千里山に移建することを決めた



竣工した大礼記念の「威徳館」

(工事担当・大林組)。場所は学部本館の後背地(現法文第1学舎の中庭付近)とし、昭和6年7月28日に起工、同年8月9日に地鎮祭を挙行了。地鎮祭には仁保亀松学長や喜多村桂一郎理事、増山忠次理事らの関係者が出席し、玉串奉奠等の儀式を執り行った。

起工後、「大札記念館」の工事は順調に進み、昭和7年2月25日に竣工した。大正11年6月の大学(旧制)昇格以来、千里山キャンパスにおける5番目の建物となった。

3日後の28日には落成式が挙行され、田崎神戸商業大学学長、堤大阪工業大学学長ら多数の名士、来賓、校友らが参列した。当日は早春の好天に恵まれ、修祓献饌、祝詞奏上ののち仁保亀松学長の式辞、砂川雄峻理事の祝辞、喜多村桂一郎理事の工事報告があり、さらに一木喜徳郎宮内大臣や鳩山一郎文部大臣らからの祝辞も紹介された。式典終了後には、引き続き図書館楼上で祝宴が催された。

落成した「大札記念館」は単層入母屋造り銅板葺き、藤原時代折衷の近世式御殿風建築で、壮麗な建築様式に独特の風格を漂わせていた。喜多村理事の工事報告には設計要項として「本建築ハ昭和即位大典ニ際シ饗宴場ノ一部即チ式百式十坪ヲ下賜セラレシヲ移転改造築セシモノニシテ設計ニ当ツテモ当時ノ威容ヲ尊重シ変更セサル様内容外觀共ニ充分意ヲ用ヒタリ」としている。建坪は184坪、内部は大ホールとなっており、正面中央には即位式の折に舞楽が行われた12坪のステージが備えられていた。また、格子天井には鮮やかな花模様の描かれた彩紙が張られ、3基のシャンデリアが周囲を明るく照らした。剣道場は床板に日本桧を張り、柔道場は畳を二重敷きにする凝りようで、5月

5日に道場開きを行った。

さらに北側の背後に木造平屋建てスレート葺き20坪の別棟付属室も建てられ、洗面所、トイレ、脱衣室、柔剣道用具置き場として利用された。

工事報告書によると、工費は移転のための解体費、運送費を含めて28,308円であった。また、本学は移築費用を校友や教職員、学生、父母らにも募っており、総勢373人から総額6,445円にのぼる寄付金を得ている。

建物の移築完了後、本学はこの「大札記念館」を「威徳館」と命名した。その出典は中国三国時代の詩人曹植の聖皇篇に「九州咸(ことごとく)賓服、威徳洞(あまねし)八幽」とあるのによる。

梨本宮守正王の染筆による扁額

昭和12年2月27日には梨本宮守正王の筆による「威徳」の大額が正面上段に掲げられた。これが現在、博物館に展示されている扁額である。

梨本宮守正王は、久邇宮朝彦親王の第4皇子で、陸軍士官学校、フランス陸大を卒業し、明治18年に梨本宮家を継承した。日露戦争に参謀本部付、第三軍司令部付として従軍。のち連隊長、旅団長、師団長を経て大正12年に大將、昭和7年に元帥となった。軍事参議官および日仏協会、大日本武徳会、防空協会等の総裁も務め、昭和18年に伊勢神宮祭主となっている。

扁額掲揚の日、本学では仁保学長以下、役員や教職員、武道部員一同が参列して厳粛に式典を挙行し、終了後、額の下で記念撮影ならびに柔剣道の模範試合を盛大に開催している。

講堂・演武場から千里寺に

その後、威徳館は1,000人を収容できる講堂として入学式や卒業式、講演・集会などに利用された。また、柔剣道の演武場として学生たちが心身錬磨の汗を流し、数多の名選手が誕生した。

戦後、学生が急増した時期には教室として利用されたこともあったが、老朽化が進んだ昭和28年末、新学舎(第1学舎)建設のために解体・撤去された。20年あまりにわたって親しまれた威徳館は姿を消し、古材は大学からほど近い千里山の「千里寺」本堂の建築資材として使用され、現在もその姿を伝えている。



威徳館の内部

北 京 の 智 化 寺

松 浦 章

I

北京の旧内城の東中央部附近に智化寺がある。智化寺は安藤更生氏が編輯した『北京案内記』（新民印書館、1941年初版、1943年10版）の内城の部において「智化寺 内一区禄米倉東口 朝陽門内禄米倉東口の路北にある山門内の一郭は、明代の巨闕として知られた王振の創建に因って名高い智化禪寺の古刹である。」（七九頁）に記される智化寺（写真②～④）が保存されている。公開はされていないが、外部から旧時の景観を伺うことが出来る。ここに若干紹介したい。

II

智化寺は王振が創建したとされる。王振とは光緒『順天府志』卷十六、京師志十六、寺觀一、内城寺觀に「智化寺、朝陽門内禄米倉東にあり。寺は正統間に太監王振が建てる。」とあるように英宗・正統帝に付いていた宦官王振である。『明史』卷三百四、宦官一、王振傳には「正統七年に至り、太皇太后崩じ、…振ついに跋扈し制するべからず。大第を皇城の東に作り、智化

寺を建て、土木を究極する。」とある。張太皇太后が没し、王振は他の閣臣を排斥して権力を極めた時期に建築されたのが智化寺であった。正統七年（1442）以降に建立されたようで、『北京案内記』には「寺の創建は正統九年正月とは言われるが、実は同八年の起工で翌九年三月の竣工になるものの様である。」（八〇頁）とされる。正統十四年（1449）モンゴル族率いるエセンが大同に侵略してきたため王振は正統



写真① 「全国重点文物保护单位 智化寺」



写真② 「智化寺 正面」



写真③ 「勅賜智化寺」正面門上部



写真④ 禄米倉胡同から見た智化寺

帝に親征を勧めた。しかしこの遠征が失敗に終わりエセン率いるモンゴル軍に明軍は全滅させられ英宗は捕虜になった。これが有名な「土木の変」であり、王振はこの事件の直接関係者であった。英宗は翌年還されるが、既に弟の景宗・景泰帝が帝位にあり、帰国後は南宮に幽閉の扱いとなった。ところが景泰七年（1456）に景泰帝が没して、英宗は天順帝として復位したのである。復辟した英宗は宦官劉恒の言を入れて智化寺に王振を祀る祠を建て、精忠と名付けている。光緒『順天府志』巻十六には「乾隆八年、像及び碑を毀つ、御史沈廷芳の奏請なり」とあり、『清史稿』巻四百八十五、沈廷芳の傳に「都城の智化寺内の明閼王振の造像及び李賢が撰するところの頌德碑を毀つ」と記しているように乾隆八年（1743）に御史沈廷芳の奏請によって破壊されている。

Ⅲ

1999年8月27日の朝7時前に宿舍の干麵胡同にある紅十字会賓館を出て禄米倉胡同にある智化寺に行った。智化寺は禄米倉胡同5号にあり、「勅賜智化寺」の石の壁がある。現在の智化寺は幅およそ60歩、約40m、奥行き70～80mの敷地に保存されているが公開はしていないようであった。石碑には「全国重点文物保护单位 智化寺 中華人民共和国 1961年3月4日公布 北京市文物事業管理局 1981年7月立」（写真①）とあり、中国の重要な保護文物に指定されている。

智化寺は朝鮮国から使節として北京に来着した朝鮮使節も北京滞在中に宿泊施設として利用している。康熙三十二年（1693）十二月二十

三日到北京に到着した柳命天は『燕行日記』において「午前に北京に入る。朝陽門内の智化寺に止宿す。」と記し、康熙五十一年（1712）四月二十日に北京に到着した閔鎮遠も彼の『燕行日記』の中で、「智化寺に止接する。」と記している。本来は會同館とされる紫禁城の南にある施設に宿泊するのであるが、柳命天等の場合は蒙古の使節が、閔鎮遠等の場合はロシア使節等が既に来着し會同館を使用していたためであった。會同館は既に無く、その意味で智化寺は朝鮮使節が宿泊したことが判明する現存の重要な史跡とも言える。

Ⅳ

ところで北京の胡同の地番であるが、東西の胡同は北側が奇数で南側は偶数、東側は数字が小さく、西側は数字が大きくなる。南北の胡同は西側が奇数で北側は数字が少ない。

禄米胡同は朝陽門南小街に直角に連なり東西に長い胡同であるから智化寺のある5号は北側にあり南に面し、朝陽門南小街から離れた東側寄りにあることが判る。

智化寺のある禄米倉胡同の禄米倉は光緒『順天府志』巻十、倉庫に「禄米倉、計五十七廠、在朝陽門内南小街」とあり、禄米倉には57の米倉があった。この米倉については先に阡陵No.20（1989年10月）に紹介した「明清時代北京の倉庫」に含まれる倉庫群の一つであった。現在もその地名は残されているのである。

【参考文献】

博光・言牛「智化寺」『紫金城』1987年第五期。

新収蔵資料 複製内行花文八葉鏡

米田文孝 川口奈穂子

近年、銅鐸の鑄造実験による復元研究で注目されている上田合金株式会社（代表取締役上田富雄氏）より、かつて福岡県糸島郡前原町所在の平原遺跡から出土した大型内行花文八葉鏡の複製品（2面）をご寄贈いただいたので、その製作実験の概要を紹介する。

1965年、原田大六氏は福岡県糸島郡前原町大字有田字平原に所在する平原遺跡を調査された⁽¹⁾。このうち、1号墓は14m×13mの方形周溝墓で、主体部は中央に掘削された4.5m×3.6mの墓壙内に剝貫式木棺（推定0.9×2.8m）が納められていた痕跡が認められたが、その周辺から内行花文八葉鏡4面を含む、39面相当の鏡片が出土した。これらの鏡群は前漢中葉から後漢前半に位置づけられることから、1号墓は2世紀前半を下るものではないと判断された。

この1号墓から出土した内行花文八葉鏡は直径46.5cmを測る大型鏡である。縁部は平縁・素文であり、その内側には9本の同心円が、鈕の周辺部には8弁8葉から構成される内行花文が施紋されている。原田大六氏は、平原出土品が中国出土の遺例とは相違して八葉の先端が花紋の頂部に向くことから仿製鏡であり、また4面（10～13号鏡）の復元径や紋様が一致することなどから同型鏡であるという見解を示している。さらに、大鏡であるという観点から伊勢神宮のご神体として伝わる、「八咫鏡」⁽²⁾との関連性も指摘する。

つぎに、今回寄贈を受けた内行花文八葉鏡の製作工程について概観しておこう。一般的に、同型鏡は真土に紋様を起こして作られた一面の原鏡から、鑄型をつくるという工程を繰り返していたと想定されている。今回の復元実験では平原出土品を原鏡として鑄型をつくることは不可能であるため、その複製品を製作する準備工程が必要である。この作業は今回の復元研究で原鏡に指定した10号鏡の実測図及び写真をコンピュータで画像処理し、レーザー光線を利用する三次元工作機で版木（合板製）に紋様を立

体的に転写することからはじまる。その後、完成した版木を石膏で型取りし、シリコン型、アルミ型と順次に製作するという作業を経て、鑄型の原型として利用する原鏡が完成する。

つぎに、鑄型（合わせ型）の作成段階であるが、原鏡の鏡背面の型取り（A面）からはじまる。まず、仮設の底部とする仕切り板上に金枠を組み、その中に原鏡を据え置いた後、鏡背部分に粒子の細かいシリカサンド（鑄物用合成砂8号）を篩で全体にかける。これは紋様の細部まで鑄出す目的で用いるが、特に原鏡と仕切り板との隙間には砂を充填し、原鏡の安定を図る。その上部には粒子の粗いシリカサンド（鑄物用合成砂6号）を金枠の高さに達するまで、均一に伸ばしつつ覆い被せる。その後、棒を用いて全面的に叩き締めるが、陥没した箇所にはシリカサンドを補充し、さらに強く叩き締める。なお、今回の鑄造では大型鏡であることから平注ぎ法を採用したため、この段階で原鏡に接して相対する位置に2か所の湯道が設けられる。

その後、金枠の高さに板で撫で揃えた鑄型外面に、シリカサンドを硬化させる目的で充填する二酸化炭素ガス用の小穴（通気口）を、原鏡を直接刺突しないように留意しながら、小鉄棒（ガス棒）を用いて複数箇所穿孔する。そして、この小穴部分から炭酸ガスを送り込むが、特に金枠に接する周縁部と原鏡を据え置いた中心部とは重点的に充填し、シリカサンドを硬化させる必要がある。

つぎにA面を硬化・乾燥させた後に上下反転させて、鏡表面の型取り（B面）作業にはいる。まず、取り除いた仕切り板と鏡表面との間に充填したシリカサンドを除去しながら、原鏡の輪郭を明確に出す。この上部にA面で使用したものと同一規格の金枠を載せ、鏡背側と同様の作業を繰り返す。その後、鑄型をA・B面に分離し、A面側の原鏡を抜き取るが、この段階で鈕部分には粘土棒を詰め込み、鈕孔を形成する。さらに、両面にモールドペイント（塗型剤）を塗布した後、燃焼して乾燥させるが、この塗型

剤は鎔湯の鑄型への焼付きを防止して鑄物の剝離を容易にすると共に、平滑な鑄肌を得る目的で使われる。

このようにして形成した鑄型は鏡背面(A面)を下位に、湯道部分に留意して再度重ね合わせて固定される。さらに、B面上部には鎔湯を注入した時に内圧で鑄型が分離しないように、重しとして金属塊(約200 kg)が載せられる。なお、A面を下位にする理由は湯に含有する不純物が上部に浮上して紋様が不鮮明になることを防止するためであり、B面(鏡表)では鑄造後の研磨により問題は回避できるという。

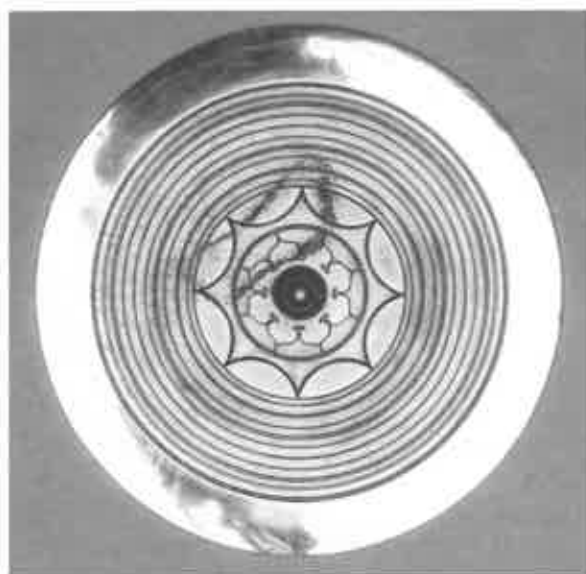
その後、湯口に取り付けられた2か所の湯受筒から同時に、約1200度に加熱された鎔湯を注入し鑄込む。鑄込まれた鏡は半日程度冷却して鑄型から取り出され、研磨作業を経て完成する。なお、今回の鑄造実験に使用した合金の主要三成分比は平原遺跡11号鏡の定量分析値に準拠させたもので、銅69.6%(不純物含む)、錫23.6%、鉛6.8%である。

以上、平原遺跡出土の大型内行花文八葉鏡の製作実験を概観したが、今後に残された研究課題は多い。例えば、従来から論議・指摘される

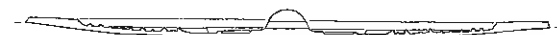
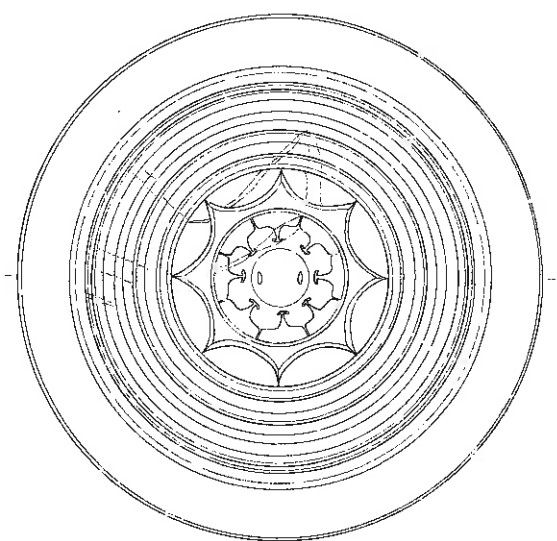
ように、踏み返し法による鏡はその原鏡より金属の収縮により直径が縮小する可能性や、紋様が不鮮明になる可能性などがある⁽³⁾⁻⁽⁶⁾。今後に予定している系統的な製作復元実験を重ねることにより、これらの問題の解釈・説明に何らかの具体的な糸口が得られるであろう。

【引用・参考文献】

- (1) 原田大六 『平原弥生古墳一大日靈貴の墓—』 葦書房 1991
- (2) 皇學館創立百周年記念神宮古典籍影印叢刊『神道五部書』八木書店 1990
- (3) 八雲立つ風土記の丘『古代の技術を考える—大量生産への工夫と技術—』秋季企画展図録 1990
- (4) (財)元興寺文化財研究所『いにしへの金工たち—古代金工技術の復元—』秋季特別展図録 1998
- (5) 第8回鑄造遺跡研究集会『弥生時代の鑄造—青銅器鑄造技術の復元—』(発表資料集) 1998
- (6) 『鏡を作る—海獣葡萄鏡を中心として—』飛鳥資料館 1999



複製内行花文八葉鏡



複製内行花文八葉鏡実測図

博物館だより

◇平成11年度 関西大学博物館 開館日数・入館者数（入館者数は3月17日現在）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
開館日数	25	22	20	17	3	7	18	18	14	12	10	10	176
入館者数	699	1911	408	440	76	129	208	659	189	51	17	22	4806

◇平成11年度 考古学入門講座「食べる—食の歴史とその意味—」の開催
10月23日(土)から11月27日(土)まで毎土曜日6回の講座を行い、1,178名の受講者がありました。

◇平成11年度 博物館購入資料
・インド祇園精舎発掘仏頭レプリカ 2点

◇平成11年度 博物館受贈資料
・複製内向花文鏡 2点（詳細については本号掲載）
・雛人形 2組
・屏風 2双

◇平成11年度 博物館収蔵資料の補修
故末永雅雄名誉教授が復元された古墳時代甲冑の補修を、4カ年計画で行っています。本年度は、計画の2年目として「眉庇付甲・桂甲」（写真）の補修を行い、完成しました。



◇平成12年度 関西大学博物館企画展ならびに博物館講座の開催について
平成12年4月3日(月)～5月20日(土)の間、企画展「古墳の発掘—兵庫県芦屋市八十塚古墳群の調査と研究—」を第2展示室で開催します。

また、企画展に関連した博物館講座を、5月13日(土)午後1時から3時半まで、関西大学博物館実習室にて行います。演題と講師については次のとおりです。

「古墳の発掘—兵庫県芦屋市八十古墳群の調査と研究—」

関西大学助教授 米田 文孝氏

西宮市郷土資料館学芸員 合田 茂信氏

芦屋市教育委員会技師 竹村 忠洋氏

どちらも無料ですので、多数のご来場をお待ちしております。

編集後記

『阡陵』第40号をお届けします。執筆していただきました先生方に感謝申し上げます。

今年度は、東大阪市の（株）上田合金、上田富雄様から、複製内行花文八葉鏡2点をご寄贈いただきました。資料の紹介を本号に掲載いたしております。さらに、文学部教授、上村哲彦先生には、雛人形2組、屏風2双をご寄贈いただきました。上田様、上村教授には、厚く御礼申し上げます。

表紙写真は、伝トロイ遺跡出土とされる広

口瓶形ガラス器です。トロイ遺跡は重層都市遺跡ですが、このガラス器はシュリーマンが発掘したことで有名な第2市や第7市には時期的に相当しません。もしトロイ所産であることが間違いなければ、吹きガラスの技法が普及した、ローマ時代相当期である最上層の第9市のものでしょう。器高20.8cm、口径14.5cm、胴部幅15.5cmを計り、緑青色の透明な吹きガラス製です。

関西大学博物館彙報 No.40 平成12年3月31日 発行
関西大学博物館 編集
ナニワ印刷(株) 印刷